

フライダנקの『ベシヤイデンハイト』研究のために

——三つの《はざま》をてがかりとして——

千 田 春 彦

1.

フライダנקの格言詩集『ベシヤイデンハイト』は十三世紀の十年代後半から二十年代の末までの間に書かれた書物で、十三世紀における人間の生きざまをさまざまな角度から観察、描写しており、読む者にさながら当時の世界の縮図を前にする思いを抱かせる。形式的にはそれぞれ四つの揚音をもち脚韻によって結ばれた二行を基本の単位とし、必要に応じてそれをふたつあわせた四行、あるいはそれ以上がひとつの格言詩を構成することもあるものの、ひとつの格言が十行以上におよぶことは稀であり、全般にはきわめて短く簡潔な格言詩を数多く連ねて構成された書物である。また、その格言詩の多くは聖書をはじめさまざまな先人の言葉を典拠としていることがベッツェンベルガー¹⁾らの研究によって確かめられている。当然のことながらそのなかには、フライダנקが典拠とした過去の作品との比較考証をまっしてはじめてわれわれに対してその意味を明らかにし始めるようなものも少なくない。だがそれとは逆に、時代を超え、背景にある宗教、文化の違いを超えて、今日のわれわれにまで直接に訴えかけてくるたぐいの格言詩もある。われわれはまず、そうした格言詩に目を向け、そこに当時の社会の中でフライダנקがいかなる位置に立っていたのかを検討することからはじめたいと思う。それは、当時の社会で重きをなしていたひとびと、すなわち、一方においては精神界の権威であった聖職者たち、他方では政治的権力を握っていた王侯貴族に対する研ぎ澄まされた批判を盛った格言詩の群れである。

「僧侶について」の章の冒頭にはつぎのような格言詩が掲げられる。

Die uns guot bilde solten geben,

die velschent gnuoge ir selber leben;
die hoesten tragent uns lère vor,
die manegen leitent in daz hor. (69, 21–24)

立派な模範を与えるべき者どもが
こぞって己が生を悪に染めている。
偉い坊主の説教のおかげで
多くの信者が糞に塗れる。

ベッツェンベルガーの注釈によればはじめの二行は、霊的指導者の努めを説く聖書の言葉（テトスへの手紙 2, 7. 8., ペトロの第一の手紙 5, 2. 3.）を踏まえており²⁾、そのうえで、現実の僧侶の生きざまがそれに反するものとなっていることを一般論として説いて、一応の意味のまとまりをなす。次の二行ではそうした僧侶の腐敗によって苦しめられる被害者たる民衆の姿が視野におさめられる。その際、四行目末におかれた hor(糞) という一語は、その比喩の大胆さにおいて、民衆の苦しみの深さ、およびその原因となっている僧侶階級に対するフライダンクの憤りの深さを強烈に印象づけている。指導者たるべき僧侶みずからが腐敗堕落しているのだから、彼らに民衆の魂を正しく導くことはできない。次の詩はそうした状況に対する批判を痛烈な比喩につつんでいる。

Ich weiz wol, daz horwic hant
machet selten wîz gewant. (70, 6–7)

わたしはよく知っている。糞まみれの手で
洗濯物は白くできないことを。

聖職者に対する批判は、その頂点に立つ法王（庁）をめぐる「ローマについて」の章においても展開される。

Alles schatzes flüzzze gânt
ze Rôme, daz si dâ bestânt,
und doch niemer wirdet vol;

daz ist ein unsaelic hol.
sô kumt ouch alliu sünde dar,
die nimt man dâ den liuten gar;
wâ si die behalten,
des muoz gelücke walten. (148, 4-11)

ありとあらゆる財の流れは
ローマへ向かい、そこに留まる。
だがローマは満ちることを知らない。
これは不浄の洞穴である。
あらゆる罪もローマに至り、
そこで罪人の背から下ろされる。
それらの罪の行方、
それは神のみぞ知り給う。

ローマはさながら、金の亡者の巣窟である。罪を取り除いてやると称して、その代償として信者から金銀を巻き上げるための巨大な組織、それが、現実のローマ法王庁の姿である。その墮落した物欲、金銭欲のとどまるところを知らぬ蔓延をフライダंकは容赦しない。

Swenn alle krümbe werdent sleht,
sô vindet man ze Rôme reht.
Rôme ist ein geleite
aller trügenheite.
die heiligen sol man suochen dâ;
guot bilde suochet anderswâ. (152, 2-7)

この世の歪みがみな真っすぐになるとき、
ひとはローマに正義を見出すだろう。
ローマは先頭になって
あらゆる欺瞞を率いている。
聖人の絵姿ならローマにあるが、

立派な模範はどこかよそで捜すがよい。

魂の指導者としての僧侶階級の權威はこのようにフライダンクによって完膚なきまでに否定されているのである。

一方、政治的権力者たる王侯貴族もまたフライダンクの鋭い批判の矢面にたたされる。

Ich n weiz nieren fürsten drī,
der einer durch got ein fürste sī. (73, 4-5)

そのうちの一人だけでも神のためにあるような
三人の王侯を私はどこにも知らない。

みずからの王侯としての権力を神から貸し与えられたものとして行使し、神の名において統治すること、それがキリスト教のもとにおける正当な政治権力のあるべき姿であるが、現実の支配者たちのありようはそれとは程遠い。

Die fürsten hânt der esele art,
si tuont durch niemen âne gart. (72, 25-73, 1)

王侯の性はロバに等しい。

鞭打たれずに他人のために為すことはない。

まず、ずばりと大胆な比喩による結論を提示し、あとからその理由づけを行うのは格言詩においてよく用いられる手法であるが、王侯の政治的倫理的怠惰を突くこの詩でも王侯とロバという取り合わせ（これ自体はフライダンクの独創というわけでもないが）が、表現の衝撃力を増すのに効果をあげている。政治的支配者に対する批判の詩はおもに「王侯と君主について」という一章におさめられているが、この章ではいまあげた詩のほかにも、動物の比喩を巧みに使って支配者を揶揄している詩がいくつか見られ、それを聞く民衆の喝采を浴びたに相違ないと思われる。

Sô der wolf nâch miusen gât,
unde der valke keveren vât,
und der kûnec bûrge machet,
so ist ir leben geswachet. (73, 16-19)

狼が鼠を追い、
鷹が甲虫を捕え、
そして国王が城塞を築くとき、
彼らの生は弱っている。

Ob ez der keiser solte swern,
ern kan sich mûcken erwern;
waz hilfet hêrschaft unde list,
sît der floch sîn meister ist? (74, 1-4)

皇帝が蚊から身を守れぬと
誓っていわねばならぬなら、
権威もその叡知も何の役にたとう。
蚤が彼の主人なのだから。

本来、国王たるものは徳の力をもってこそ国を治めるべきである。そののできない者が、武力に頼り、あまつさえ、防御のための城を築くことにこころを奪われるのだ。また、神によって最高の叡知と権力を与えられているはずの皇帝が、現実には蚊や蚤のごとき小事に汲々たるありさまである。それゆえ、フライダンクは次のような極言にまでいたるのである。

Der keiser sterben muoz als ich,
dem mac ich wol genôzen mich. (74, 5-6)

皇帝も我と変わらず死は免れぬ。
我は皇帝と肩を並べる得るのだ。

個体としての生の有限性という動かしようのない事実を根拠としたものとはいえず、現世の最高権力者たる皇帝を相手に、一介の遍歴詩人であるフライダンクが発するこの言葉は、聴くものを一瞬ひやりとさせる挑発性を孕んでいる。命懸け、といっても決して過言ではあるまい。

Seit ich die wârheit z' aller zît,
sô funde ich manegen widerstrît;
dar umbe muoz ich dicke dagen:
man mac ze vil der wârheit sagen.
seit ich allez, daz ich weiz,
sô müeste ich bûwen fremden kreiz. (74, 23-75, 1)

つねに真実を語るわたしは、
多くの抵抗にあってきた。
それ故しばしば沈黙せねばならぬ。
ひとは真実を語り過ぎることがある。
知っていることのすべてを口にしようなら、
わたしは異郷を棲処とせねばならないだろう。

ここに、フライダンク自身、舌禍の危険を承知の上であったことが知れる。だが、この言葉の前にも後にも、フライダンクは、権力者を相手に歯に衣きせぬ批判を展開しているのである。この詩はふと臆病風に吹かれたフライダンクの弁解の言葉ではない。むしろ最後の二行の背後には、次のように語るフライダンクの不敵な面構えが透けて見えはしないだろうか。——「俺はお前たちの悪行の数々をまだまだたくさん知っているのだ」と。

中世の社会は大きく三つの身分によって構成されていると考えられていた。フライダンクにも、そうした社会観に基づく次のような格言が見られる。

Got hât driu leben geschaffen:
gebûre, ritter unde pfaffen; (27, 1-2)

神は三つの身分を創造し給うた。

農民，騎士そして僧侶である。

このうち，騎士すなわち政治的権力者と僧侶については，すでにわれわれはフライダנקの見解を追ってきた。あと一つ残る農民については、『ベシャイデンハイト』のなかでまとまった見解が述べられることはない。だが，フライダנקの考えは次のような箇所から十分に窺い知ることができる。

Der dorfman ist niht wol beriht,
kan der pfaffe des glouben niht. (70, 20-21)

村人の教えが行き届かぬは，
僧侶が信仰を弁まねぬゆえ。

Lant unt liute geirret sint,
swâ der kûnec ist ein kint, (72, 1-2)

国王が幼子であるところ
国も乱れ民も乱る。

前者において「村人」と訳した *dorfman* は一般には「農民」という訳がなされるほどに *gebûre* と同義である。また，後者において「民」といわれているのも，悪政に為す術もなく翻弄される農民をさすともてよいであろう。いずれの場合にも農民は，墮落した聖俗両界の支配に喘ぐ不幸な被支配者，社会的弱者と位置づけられている。としてみれば，フライダנקが支配者，強者，あるいは加害者たる者たちの行状をいわば陽画として暴きだし，農民は陰画にとどまっているとしても不思議ではないのである。

さて，さきに引いた神によって創造された三身分について述べた27, 1-2は，実は，「高利貸しについて」という章のはじめに置かれていて，さらに次のような詩行をあとに従えている。

daz vierde geschuof des tiuvels list,
daz dirre drier meister ist:

daz leben ist wuocher genant,
daz slindet liute unde lant. (27, 3-6)

第四は悪魔の知恵が創造し、
他の三者の主人である。
その身分は高利貸しと呼ばれ、
民と国を丸呑みにする。

ここには第四の身分として「高利貸し」という身分が挙げられているのである。しかし、「農民」「騎士」「僧侶」の三者が「神によって」創造されたとされるのに対して、この「高利貸し」は「悪魔の知恵」の産物として謂わば原理的に神に背く不正なものとされていること、またその結果として、「高利貸しについて」の章の表現はやや理念的断罪に傾いて、王侯や僧侶に対する批判に見られた具体性、およびそれを支えていたフライダンクの気魄のようなものがここでは感じられにくいこと、これらの点を考慮すると、高利貸しという身分はフライダンクの考えのなかではかの三身分と同じ資格のもとに当時の社会の構成要素と見做されていたわけではないとみてよさそうである。本来、神のためにあるべき者たち、すなわち王侯と僧侶が、そのつとめに背き、神に背いていることこそが、フライダンクによる同時代批判の眼目であったのだから。

フライダンクは当時の社会において力をもっていたもの、聖俗両界の支配者の腐敗堕落を等しく斬った。いったい彼はどこに足場を置いてこのような発言をなし得たのであろうか。

フライダンク自身が、どの身分の生まれであり、どの身分のもとに生きたのか、それを知る手掛かりは残念ながら乏しい。古文書の記録などからわれわれが知りうるのは、彼が僧侶でもなく、また騎士でもなく、*„vagus“*「遍歴詩人」と呼ばれていたことだけである³⁾。聖職者と騎士、当時の社会にあって重きをなしていたこれらふたつの身分のいずれにも、フライダンクは属していなかった。もちろん、農民であったわけでもない。いうなればフライダンクという詩人は、社会を構成する三つの身分の《はざま》に身をおいていたのである。権力の庇護の下にあるわけでもなければ、聖職者として教会組織の中に確たる位置をもつでもないこの《はざま》という立場は、生きていくうえでこの上なく不安定で困難に

満ちていたであろうことは想像に難くないが、逆にこの《はざま》にあったからこそフライダンクは一党一派に偏することのない眼差しをもち得たのである。

Dehein leben ist sô guot,
sô dâ man inne rehte tuot. (31, 22-23)

そこで人が正しく行うとき、
どの身分でも立派なものである。

これは「現世について」の章におさめられた格言詩であるが、ここでフライダンクが、特定の身分に与するのではなく、„dehein leben“ 「どの身分」に対しても、„rehte tuon“ すなわち神の前で正しき行いをなすことによって「立派な」身分たりうる可能性を認めていることにわれわれは十分に留意せねばなるまい。

Fr. ノイマンは、中世ドイツ格言詩の代表者のひとりヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデにおいては騎士身分に関連する思考が指導的役割を果たしているのに較べて、フライダンクは「身分をこえて人間的なもの」を目指していると指摘しているが⁴⁾、それをわれわれの言葉に置き換えるなら、フライダンクは身分の《はざま》に位置していたればこそ、身分を超えた思考が彼に可能となったといえることができるであろう。

2.

これまでわれわれは多面多岐に亙るフライダンクの格言詩から当時の代表的身分である聖職者と王侯に関するものを選んで、フライダンクの社会批判を読みとってきたのであるが、そこには常に神の存在が最大の前提とされていた。こんどはこの「神」と、諸身分をひっくるめた「現世」⁵⁾ というものに関するフライダンクの言葉に耳を傾けなくてはならない。

『ペシャイデンハイト』の全体の構成⁶⁾を見ると、まず一番最初に置かれているのが「神について」の一章である。そして、さまざまな種類の人間や人間の行為を綿々と描き続けたあと、最後には「十戒について」「死について」「最後の審判について」に続いて「ひとつの祈り」の一章、すなわち神に対して直接に語り

かける祈りの言葉がおかれてこの書を閉じている。つまり、『ベシヤイデンハイト』は、神に始まり神に終わる大枠の中に人事万端をつつみこむ構成になっているのである。すでにこのことにもフライダנקの世界観はよく現れているといえよう。

大地と空、そしてその間にある人間の営みのすべて、力をもつものもそうでないものも、みな神にのみその源をもつのであり、その神に仕えること、神によってみずからに与えられた努めを神のために果たしていくことこそが、人間の生きる唯一のあるべき姿なのである。

「神について」の最初の格言は次のようにいう。

Gote dienen âne wanc
deist aller wîsheit anevanc. (1,5-6)

揺るがぬ心もて神に仕えること
これぞすべての知恵のはじまりである。

書名の『ベシヤイデンハイト』は「物事を判別する能力」「見識」の謂であるから、すべての知恵のはじまりは神への奉仕にありとするこの格言が、冒頭のこの位置に配されていることは、『ベシヤイデンハイト』においてフライダנקがこれから展開するであろう「見識」もまたすべて神への奉仕に始まっていることを、静かにしかし厳然と宣言するものである。

しかし、現実の人間のありさまは、われわれもすでにフライダנקの言葉を通して見てきたように、あるべき姿からは程遠いのがつねである。

Diu werlt wil nû niemen loben,
ern welle wüeten unde toben.
swer roubes, brandes, mordes gert,
untriuwe, huores, derst nû wert. (32,7-10)

いまやこの世が讃えるのは
荒れ狂い暴れ回るやからばかり。
強盗、火つけ、殺人者、
それに背信、密通者、いまや奴らに値打ちがある。

叙事詩や抒情詩にうたわれた美しい理想とは似ても似つかぬ、中世社会の現実である。この詩のなかで二度繰り返されている「いまや」という言葉に、そしてまた次のような詩に、われわれは世の末を嘆くフライダンクの肉声を聞く思いがする。

Waz tuot diu werlt gemeine gar?
si altet, boeset; nemt es war. (30, 23-24)

現世はおしなべて何をなしているか。
年をとり悪くなるのみ。よく心せよ。

このような現世をまえにして、当時の知識人がとりうるもっとも簡単な手立ては、現世を完全に否定し去り、石壁によって現世から隔絶された修道院のひんやりとした薄暗がりのなかで、ひたすら神に祈りを捧げつつ、神に召される日を待つことであろう。だが、フライダンクはその途をとらない。ここにわれわれは、フライダンクの現世観のおおきな特徴を見出すのである。「現世について」の章から具体例を引いてみよう。

Swer got und die werlt kan
behalten, derst ein saelic man. (31, 18-19)

神と現世とをもらともに
手にするものは幸いである。

Got nieman des engelten lât,
ob er der werlde hulde hât. (31, 20-21)

現世の好意をうけたとて
神はその償いを求めはしない。

現世に対するフライダンクのこうした態度を、S. ジンガーは「寛容な立場」と呼び、それが「稀なこと」であるとする⁷⁾。一般には、聖書ヤコブの手紙 4, 4, 「世

を友とするものは、神への敵対である」という厳律が支配していたのだから。

揺がぬ心で神に仕えつつ、なお、汚辱にまみれたこの現世にとどまること、あるいは、逆にいうなら、現世の塵芥のなかにあってなお、神を愛し神を恐れ、罪を犯さずに生きること、これをこそフライダंकは人間のあるべき姿と見る。人間が神への奉仕を行う場は、あくまでこの「現世」をおいて他にはない。しかし、これを実現することはフライダंकにとっても決して易しいことではなかったであろう。それ故にこそ彼は次のようにいうのである。

Swër mit der werlde umbe gât
und des deheinen meister hât:
mac der sünden widerstân,
den wil ich z' eime meister hân. (32, 25-33, 1)

誰を師とするのでもなく
この世と交わっておりながら
罪をおかさぬ者がもしあれば、
私はそのものをこそ師としよう。

フライダंकですら誰か師を求めたくなるほど、それは困難な道なのだ。

ほとんど両立不可能に見える「神」と「現世」の板挟みのなかで、そのどちらか一方だけを求めるのではなく、なんとかして両者とも失わずに生きていくこと、これをわれわれはフライダंकにおける第二の《はざま》と呼びたいと思う。フライダंकは身分と身分の《はざま》でどの身分にも偏さぬ平衡感覚をもち得ていたが、「神」と「現世」の《はざま》でも、フライダंकの眼差しは性急に一方に就くことなく冷静に両者を見据えているのである。神を棄てて現世に就くのは論外としても、現世を棄てて神に就くことへの誘惑はフライダंकのころにもなかったわけではないだろう。だが、それをせず、あくまで《はざま》の位置に踏み留まったからこそ、フライダंकの言葉は中世という時代とキリスト教世界の枠を超えて現代のわれわれにまで、訴えかけてくる力を保ち得ているのである。

とはいえ、神と現世とのあいだの緊張は重くフライダंकのころに迫った。

Der werlde maneger lachen muoz,
der wol erkennt ir valschen gruoze. (32, 13-14)

現世のうそがわかっているも、
つくり笑いは止められぬ。

Daz herze weinet manege stunt,
sô doch lachen muoz der munt. (32, 15-16)

こころが涙するときも
口は笑いを絶やせない。

Der lîp muoz in der werlde leben,
daz herze sol ze gote streben. (32, 17-18)

からだは現世に生きるほかなくも
こころは神へと勤しむべし。

このような分裂に苛まれながらも、神と現世の《はざま》に生きることをフライダンクに可能にしたもの、それをわれわれは次に、第三の《はざま》として考えていかななくてはならない。

3.

フライダンクの世界観がその根本においてキリスト教に根差していることは疑う余地がない。だが、彼の信仰のありかたは決して狂信や独善に陥ることではない。むしろ彼は常に有限な人間としてのみずからの知の限界を意識している。このことは、まず、神学そのもののうちにその根拠を見ることができる。その名も「無知について」という章においてフライダンクは次のように言う。

Vier grôziu dinc sint uns unkunt,

diu wir doch nennen manege stunt:
got, sêle, engel unde wint;
swie heimlich sie den liuten sint,
son seit mir niemen âne wân,
wie s' alliu vieriu sîn getân. (134, 6-11)

絶えず口にしていながら、
知らない大事が四つある。
神、魂、天使、そして風。
どれほど知ったつもりでも、
これらのものの何たるかを
確と語ってくれるものはいない。

神の存在そのものが疑われるのではないが、それがいかなるものであるかは人知の及ぶ埒外にある。また、魂にしても天使にしても、いずれも神の創造にかかるものであって存在することは疑いようがないが、その性質となるとやはり人間には知り得ないのであって、その点で、吹く風のどこから来たりてどこへ去るかが人間にははかり得ないのと同断なのである。

ここに列挙された四つのもののうち、たとえば第一の神については、聖書テモテへの第一の手紙 6,16「神はただひとり不死を保ち、近づきたい光の中に住み、人間の中でだれも見た者がなく、見ることもできないかたである」がベツェンベルガーによって典拠として指摘されているし、他の三つについてもやはり聖書にその根拠を求めることができる⁸⁾。その意味で、ここにフライダンクが語る人間の知の限界はそもそもキリスト教の教義の中に存在する教えの確認にすぎないといえなくもない。

しかし、フライダンクにあって人知の限界の問題は決して教義上のそれに留まることなく、しばしばより強くフライダンクという個人が自分自身に投げかける自己認識の問いとして現れるのである。つぎのふたつは「魂について」の章からの引用である。

Wie diu sêle geschaffen si,
des wunders wurde ich niemer frî.

wannen s' kume od war si var,
diu strâze ist mir verborgen gar:
hie enweiz ich selbe, wer ich bin. (17, 23-27)

魂とはそも何ぞや、
この不思議はつねに私を離れない。
どこから来て、どこへ去るのか、
その道筋はまったく隠されている。
この世で私は、自身の何者たるかも知らない。

Ich n weiz selbe niht ze wol,
wer ich bin und war ich sol; (18, 18-19)

私とは何者であり、何処へ向かうべきなのか、
わたし自身もよくわからない。

第一の引用の四行目まではさきほどの「無知について」からのものと同様の神学的色彩をとどめるが、最後の五行目に至ると、それまでの「魂」についての問いが「自分」を主語とする問いに変容して、己みずからを見つめるフライダルクの真摯な自己探究の姿を窺わせる。第二の引用においてフライダルクはこの五行目とおなじ地点に立ち帰っている。

「認識について」の章にも、自己認識の難しさを語っている箇所が見られる。

Maneger waent erkennen mich,
der selbe nie erkande sich;
erkande sich ein ieglich man,
er lüge ein andern selten an. (106, 12-15)

おのれのことすら知らぬのに
私を知ったつもりの者の多さよ。
誰もがおのれを知るならば、
誹謗中傷も止むだろう。

Swer sich selbe erkennen kan

ze rehte, derst ein wîse man. (106, 16-17)

正しくおのれを知る者あらば

そのものは賢者である。

この二つの箇所についてもベッツェンペルガーはいくつかの典拠を指摘しているが⁹⁾、たとえ典拠があるにもせよ、フライダンクが繰り返しこの自己認識の難しさに言及しているという事実によれば、批判の矢を外に向かって放つだけではなく、それ以上にきびしいまなざしを自分自身のうえにそそぐフライダンクの誠実さを見るのである。

フライダンクは自分の思考、思想がなにもものにも妨げられない自由をもつことをつぎのように繰り返し宣言する。

Diu bant mac niemen vinden,

diu mîne gedanke binden;

man vât wol wîp unde man,

gedanke nieman vâhen kan. (115, 14-17)

わが思考を縛る縄は

何人にも見つけ得ない。

身体は縄で縛れても、

思考は誰にも縛れはしない。

Sô dicker mûrn sint niergen drî,

ich gedanke wol durch sî. (115, 18-19)

わが思考が貫き通せぬほど

ぶ厚い壁は三つとない。

Ezn wart nie keiser alsô rîch,

mit gedanken sî ich im gelîch. (115, 20-21)

世に出でし尊き皇帝の数あれど
思考もてわが及ばざるはなし。

Ichn gaebe mînen frien muot
umbe deheinen slahte guot. (131, 3-4)

いかな財宝をつまれても
わが自由なところを棄てはしない。

いずれをとっても、まさに **Frei-dank** (自由な一思考) というその名にふさわしい自由な精神のはたらきをもつ者の自信と気概のほどをありありとうかがわせる輝きをこれらの言葉は放っている。

ゆるがぬ心で神に帰依し、自由な精神を存分に発揮して神のためにこの世にはたらくこと、それはひとつの確信、ひとつの「知」である。しかし、フライダンクにおいてはつねにその傍らに、神について世界についてさらには自分自身についての「無知」の自覚が控えていて、前者が硬直した妄信に陥ることを防いでいる。これを、フライダンクの第三の《はざま》、「知」と「無知」との《はざま》と呼ぶことができるだろう。この《はざま》にこそ、フライダンクの思考の柔軟さをうみだす源泉がある。フライダンクの格言詩の多くが先人のことばを典拠としているにもかかわらず、黴臭いお説教の集積に堕していないとすれば、それは、彼の格言のひとつひとつが、一度この「無知」の自覚という濾過器をくぐり抜け、フライダンクという柔軟にして謙虚な人間の体温を与えられているからかも知れない。

お わ り に

われわれは遠く隔たった現代のわれわれにまで訴えかける力をもつフライダンクの格言詩の世界に、三つの《はざま》という観点から分け入ろうとしてきた。知と無知のはざまを絶えずきびしい自己探究の姿勢を保って往来していたからこ

そ、フライダンクは神と現世のはざまにあって、また現世における諸身分のはざまにあって、ひとつの考え、ひとつの世界観に硬直化することなく、自由で柔軟な思考を飛ばたかせることができたのである。

だがこの思考の自由さは、身分の別が思考をもつよく規定して異なる身分のものについての理解を阻みがちであった時代、キリスト教が遍く支配し現世というものにほとんど何ら積極的価値の置かれなかったと考えられがちな十三世紀という時代であって、時代離れした印象を与えずにはいない。

デ・ボアはフライダンクの現世に対する見方、すなわち、それを儻くまた汚れたものとして棄て去るのではなく、むしろ現世をこそ人間の活動の唯一の場とみているところに「遠くゲルマンの時代にまで遡る民衆の伝統」を見て、フライダンクをキリスト教以前のゲルマン的心性との関連において考察する可能性を示唆している¹⁰⁾。フライダンクという人物を通じてわれわれは、ゲルマン的心性とキリスト教、という大問題のまえにたたされることになる可能性もあるのである。

一方、フライダンクの写本が彼の生きた十三世紀から大きく時代の下った十四、五世紀にむしろ多く求められたという事実¹¹⁾を重く視るならば、今度は逆にフライダンクは中世の枠をルネッサンス以降の近代へ向かって踏み出そうとしていたのだという仮説も可能となってこよう。たしかにフライダンクの思想の自由さには、近代的「個人」の萌芽を感じさせるものがあるのである。

このまったく相反するふたつの議論は、いずれをとっても俄かに結論をもとめべくもないが、これほど大きな問題圏を孕むこと自体、フライダンクが今日なお論ずるに値する第一級の詩人であることを、何よりも雄弁に物語っていると言えるであろう。

以上で三つの《はざま》をてがかりにみてきたフライダンク像は、もとより彼のほんの一面を捉えるものにすぎない。その意味でわれわれはいまようやくフライダンクの『ペシャイデンハイト』研究の入口に立ったばかりである。多岐に互る彼の格言詩の世界を、より包括的に、また典拠との比較のもとに検討する作業は、上に挙げた大きな問題の考察とならんで今後の課題である。

註

テキストには Fridankes Bescheidenheit von H. E. Bezzenberger. Neudruck der Ausgabe 1872. Aalen 1962. を用い、引用の箇所は慣用にしたがって W・グリムの版のページ数と行

数を引用の直後の括弧内にしめた。

- 1) ベッツェンベルガーは200ページ近くに互る詳細な注釈を付しているが、語句註はごく僅かであり、ほとんどが典拠の指摘に当てられている。ほかに、網羅性にかけてはベッツェンベルガーにややひけをとるが、Samuel Singer: Sprichwörter des Mittelalters. 3 Bde. Bern 1946/7. にも典拠の指摘がある。
- 2) Bezzenberger a. a. O. S. 354f.
- 3) Vgl. ebd. S. 16 f. u. a.
- 4) Friedrich Neumann: Meister Freidank. in: Mittelhochdeutsche Spruchdichtung. Hg. Hugo Moser Darmstadt 1972. S. 322.
- 5) 中高ドイツ語の *werlt* には「現世」という抽象的な意味とならんで、「世間」「世の人々」というほどの具体的な意味もあり、以下の引用でも適宜訳し分けを行うが、原語はいずれも *werlt* である。
- 6) 各章の標題はW・グリムがつけたものであるが、主要な写本にしたがったその全体的配列の枠組みは信頼できる。Vgl. Bezzenberger a. a. O. S. 48-63.
- 7) Singer a. a. O. Bd. 2. S. 174.
- 8) Bezzenberger a. a. O. S. 425.
- 9) Ebd. S. 393.
- 10) Helmut de Boor: Die Höfische Literatur. Vorbereitung, Blüte, Ausklang 1170-1250. Zehnte Auflage bearbeitet von Ursula Hennig. München 1979. S. 390.
- 11) Vgl. Friedrich Neumann a. a. O. S. 310.

参 考 文 献

Hugo Hildebrand: Didaktik aus der Zeit der Kreuzzüge und den folgenden Jahren.
(Deutsche National-Literatur Bd. 9) Berlin/Stuttgart.

Helmut de Boor: Die Höfische Literatur. Vorbereitung, Blüte, Ausklang 1170-1250.
Zehnte Auflage bearbeitet von Ursula Hennig. (Geschichte der deutschen Literatur.
Von den Anfängen bis zur Gegenwart. Begründet von Helmut de Boor und Richard
Newald. Zweiter Band.) München 1979.

ders. (hg): Mittelalter. Texte und Zeugnisse. (Die Deutsche Literatur Bd. 1) München
1965.

Friedrich Neumann: Artikel in: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserslexikon.

hsg. von W. Stammer Bd. 1. Berlin/Leipzig 1933. Sp. 660–670.

ders. : Meister Freidank. in: *Mittelhochdeutsche Spruchdichtung*. hsg. v. Hugo Moser Darmstadt 1972. S. 306–324. erstmals erschien in: *Wirkendes Wort*, Sammelband II: *Ältere deutsche Sprache und Literatur*, Düsseldorf 1963. S. 259–269.

ders. : Artikel in: *Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserslexikon*. Zweite völlig neu bearbeitete Auflage. Berlin/New York 1980 Bd. 2 Sp. 897–903.

Samuel Singer: *Sprichwörter des Mittelalters*. 3 Bde. Bern 1947. Freidanks *Bescheidenheit* Bd 2. S. 153 bis Bd. 3. S. 119.